



TITLE:

社會的勢力の分析

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 社會的勢力の分析. 經濟論叢 1934, 39(6): 762-782

ISSUE DATE:

1934-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130529>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號六第

卷九十三第

行發日一月二十年九和昭

論叢

地方税としての酒税……………法學博士 神戸正雄
社會的勢力の分析……………文學博士 高田保馬

時論

増税とインフレーション……………經濟學博士 小島昌太郎
臨時利得税を論ず……………經濟學博士 汐見三郎

研究

經營信任會の構成に就いて……………經濟學士 大塚一朗
アダム・スミスの貨幣價值觀……………經濟學士 岡橋保
爲替相場
の暴落が國民の富に及ぼす影響について……………經濟學士 江口巳與吉

說苑

貨幣量と銀行制度……………經濟學士 中谷實

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題
本誌第三十九卷總目錄

社會的勢力の分析

高田 保馬

社會的勢力、又は簡単に云つて勢力とは何を意味するか。社會的といふ形容詞はたゞ、人と人との關係に於ける、人々の間に於けるといふだけのことを意味するに過ぎぬ。従つてこゝにいふ勢力は、單なる個人の努力、可能、能力といふが如きものではない。それはある人又は其集團が他の人又は其集團に何等かの作用を及ぼし得る可能である。此「何等かの作用」を如何なる作用として見るか、そこに異見が分岐し得る。

私は此勢力といふ國語に *power*, *Macht* をあつることにしてゐる。勢力といふならば、*power* よりもむしろ *force* といふべきであると、かつて京都大學文學部のクラーク教授によりて指摘せられた。けれども私は、*force* がむしろ武力を意味することの多いところから、權力を意味せしむる爲に使用せらるる *power* の言葉をあつることが、順當であらうと考へてゐる。而して勢力が武力、強制的なる權力のみを意味せしむるのではない點から、勢力を *Macht* とつて *Gewalt* とは云はないことにする。*Might* といふ言葉は種々なる意義に用ひらるるであらうが、私はそれを、社會的關係から離れたる、ある人又は個體のもつ能力、作業力などの意味に解して居り、さうすることが一般的の用例に従ふわけであると考へてゐる。

勢力とは或る一主體が他の主體に何等かの作用を及ぼし得る可能である。これは其一主體を中心として見たる概念である。此同一の事態を、一方から他方にある作用が加へられ、他方がこれ

を受くるといふ相互關係として見るときに、これを勢力關係といふ。即ち勢力關係といふのは同一の事態を相互の關係として見たるものであり、勢力といふのは一方が作用を及ぼす側のみを取り出したるものである。勢力關係は一面から見ると、優越又は上位關係 (Uebermachtverhältnisse, Ueberordnungsverhältnisse) であり、他面から見ると下位關係 (Unterordnungsverhältnisse) である。

然らばこゝに問題としてゐるところの作用とは如何なる作用であるか。一主體が其意志の方向に、意識的なると否とを問はず、他の主體の意志を決定する作用、云はば他人の意志内容の決定の作用である。だから勢力とは自己の意志の方向への他人の意志内容の決定の可能に外ならぬ。他人が意志を決定せらるることを服従といふならば (Obedience, Gehorsam)、勢力とは服従せらるることの可能である。たゞ此可能は空虚なる確率又は蓋然率としての可能ではない。相互の情意的態度の中に基礎づけられてゐるところの、云はゞ相互的用意としての可能である。此際、意志決定といふことについて、若干の分析を必要とする。他人の意志決定が消極的積極的の二様に行はれうる。一は、他人の意志をして、一定のものであらしめぬやうに決定することである、これは一面から、他人をして自己の意志遂行に抵抗せしめないことと見得る。即ち、他人をして抵抗の意志をもたしめず、又これを一たびもつにしても、拋棄せしむることと見得る。他は他人の意志をして、自己が指令する如き内容のものたらしむることである。即ち、他人は、其意志がある一定のものでないことを要求せらるるに止まらず、進みて他の一定のものであることを要求せら

れる。此際、要求が單に消極的のものたるに止まらず、積極的のものである。他人の意志決定が積極的である場合は、他人の意志の指令即ち命令の行はるる場合である。命令の行はるる場合の勢力關係の代表的なるものは支配關係である。

勢力の何であるかに關する代表的學說を吟味してみよう。其一。ヴァイザアはスピノザの見解を引用して、勢力とは人間感情に對する支配であるといふ。友人が相手に對し、愛するものが愛人に對して有する勢力は感情の媒介を通して作用する、それは社會に於ける勢力を意味する。法律の勢力、信念や知識の勢力、道德的勢力、これらは皆それが感情に作用するところの壓迫に外ならぬ。武力の如き外部的勢力とてもそれが勢力たる所以は、人々を壓迫して感情を支配する點に存する。^{1a)}さて此見解をどう見るべきであらうか。勢力が人間感情に對する支配であるといふことは、當らぬ。專制君主といへども征服者といへども、反抗する臣民、反感にもゆる被征服者の感情を、其武力を以て、其權力を以て如何ともすることは出來ぬであらう、此場合、感情の支配は此の如くに行はれがたい。併しながら何人も彼等の勢力の強さを否認し得ないであらう。然るに他人の感情の支配は例へば、すぐれたる俳優の觀衆に對し、又は美しき婦人の其周圍の人に對する場合に於て、極めて顯著である、彼等は意のまゝなる感情を其周圍の人人に生ぜしむるであらう。けれども此等の場合に社會的勢力が強いとは見られてゐない。

ヴァイザアの die Herrschaft über das menschliche Gemüt を單に感情に對する支配と譯するの

は、或は狭きに過ぐるであらう。ヴァイザアは内的勢力を解して *die Beziehung auf das Gemüth, auf das seelische Fühlen und Wollen* となしてゐる。²⁾ けれどもヴァイザアに於ける勢力概念の重點が感情の支配に置かれてゐることは争ひがたい。

其二。マクス・ヴェーバーの勢力概念は可なりに廣くとり入れられてゐる。それによれば、社會關係内に於て自己の意志を抵抗に反對して貫徹するすべての可能 (*die Chance*) が勢力である。^{2a)} これに對して支配といふは、更に精確に規定せらるべき屬性をもつてゐる。支配とは命令に對する服従を見出す可能である。さて、此主張に對して述べべきことは、次の諸點である。まづ、此可能といふのが社會關係に基づくところの可能を意味することとなつてゐない。社會的勢力であるからには社會關係の中に基礎をもつところの可能、從つて當事者の用意でなくてはならぬであらう。次に、支配は勢力の一の形態、一の特殊なる場合であるはずであるが、二者の聯絡が此際、明確にせられてゐると云ひがたい。支配が一種の服従であるならば、勢力もまた服従そのものに存すべきであらう、然るに勢力が服従といふ相手の態度によらず、主體の態度によつて定義せられてゐる。第三 ヴァイザアの如く勢力概念の中心を感情に求むることに伴ふ困難は、なるほど避けられてゐる。けれども、勢力の作用が抵抗の努力に打克つ點に存するとは云ひがたい。所謂内的勢力の場合にあつては、相手はむしろ自發的に勢力をもつ主體の意志の貫徹を求めてゐる。これに抵抗する何の努力もない（抵抗のないところに自己の意志を貫徹するといへば、すべて對

2) a. a. O., S. 5.

2a) Max Weber, *Wirtschaft u. Gesellschaft*, S. 28.

等の個人間にもあることである。抵抗に反對して自己の意志を貫徹する可能といふは、勢力の説明としてあまり狭きに失する。それは外的勢力を説明するに止まるであらう。オッペンハイマは此場合の社會的關係に於てといふことを狭く解して、純粹なる武力關係を除外しようとしてゐる。これに類似せる見解は他の學者にも認めらるるところである。ところで、社會的關係を以て人と人との間の關係、即ち人間的關係として見るときには、武力の行使せらるる場合に於て、單純なる物的關係(フィアカント)といはるべきもののあるはずはない。如何に互に反感と憎惡ともえてゐる關係とても、それは單に人の物に對する關係ではない。相互の間には情意の理解があり、相手を人として見る態度がある。このことは、所謂外生的武力(die exogene Gewalt)に於てすらさうであると思ふ。異なる集團の接觸に際して武力征服の關係の成立する場合、一方の集團が他方に武力を加ふるとせよ、彼等の間に何等かの理解があり、相互間の交渉が成立する。そこに社會的關係がないとはいはれない。而もそこに於て、一方が他方に武力を加ふるとせよ、此武力は兩集團を合したる綜合的な社會に於て成立しそれに基礎を置けるものではない。云はゞ、征服せらるる集團にとつては外生的武力である。けれども、この集團の關係が人と人との關係である以上、これを社會關係の外部に於ける勢力とは稱しがたい。此意味に於て、オッペンハイマがヴェエバアの勢力概念に加へようとする制限乃至修正は、別に意味を有せざるものである。このことは、ジンメルが相互關係についてフィアカントが社會關係について加へたる相互性

3) Oppenheimer, Artikel, Machtverhältnis, Handwörterbuch der Soziologie, S. 338.
4) a. a. O., S. 341.

の制限についてもこのべうところであらう。

私は轉じて、社會的勢力の諸形態又は種類を考察しようと思ふ。

二

社會的勢力の諸形態を考ふるに當つては、まづこれと、社會的壓力又は社會的強制ともいふべきもののとの區別を明にする事を要する。後者は或は單に社會力として表現せられうるであらう。(こゝには全體社會をさしていふのであるが)社會が維持せられ存續しうる爲には、成員の上に何等かの壓力が加へられねばならず、個人の活動がつねに一定の方向への制肘を蒙る。これは勿論種々雜多の形態、方法に於て行はれる。或は法律、或は道德、或は慣習、或は宗教等。これらの壓力のうちあるものは全く無名的に且又無人格的アンニマス
インパソナルに加へられる。無名的といふのは、何人がこれを命令し、強制し、支持するといふことなく、單に世間又は世の中の要求として加はることを云ふ。多くの慣習、風俗は大抵此の如きものに屬する。これらの壓力乃至強制の中にあつて、ある特定の個人又は集團の意志に従屬すべしといふ内容のものがある、又然らざるものがある。後者を稱してこゝに無人格的に加へらるるといふのである。又上に述べたるもののあるものは、君主又は國家の名に於て、云はゞ表名的に加へられ、且又人格的に加へられる。何れにせよ、社會を維持する所以のすべての拘束乃至規範はこゝに云ふ社會的壓力を形づくる。これらのうち、無名的なると表名的なるとをとはず、人格的なものがある。即ち壓力のうち、ある特定の人格に對

5) Vierkandt, Gesellschaftslehre, 2. Aufl. 1928, S. 169, 280.

5a) Wieser, Recht u. Macht, 1910, S. 8.

する從屬をその内容とするものがある。此人格的な壓力であるところの從屬の反面は即ち、其人格の社會的勢力を形づくる。勿論、かの社會的壓力のある部分が未だ、たゞ事實としてのみ成立し規範化するまでに至らざる間に於ては、それに依存する社會的勢力とても、規範によつて支持せらるるとは云ひがたい。たゞ事實としての壓力が之を支持するに止まるものと、見らるべきである。

社會的壓力の中にあつてある人格に歸屬したるもの、即ちその人格への從屬を意味するもののみが、社會的勢力を形づくる。前者を社會力といふならば、後者はまさに個人的勢力である。此意味に於ける社會的勢力は種々なる見地から種々に區分せらるるであらう。其一は、內的勢力と外的勢力との區別である。此點について、ヴィイザアの见解を注意しよう。ヴィイザアによると武器や、城塞は勢力手段であるが勢力ではない、此手段を利用するものは、外的勢力 *die äussere Macht* をもつわけである。外的勢力は外的勢力手段の處分による感情の支配である。これに對して內的勢力 *die innere Macht* は、外的勢力手段を媒介とせず、社會に於ける人人の感情の直接なる支配である、人人の感情を動かす勢力が認められてゐる所の法律、道德、信仰、知識、觀念思潮、運動及び慣習、習俗等の力は皆これに屬する。而して、此二のうち、屢々外部的勢力のみが唯一の勢力であるかのやうに見られる、それは其作用が外部的にあらはること最も顯著なるが故である。けれどもまことに基礎的なものは内部的勢力である。外部的勢力手段従つて外部的

6) Wieser, Gesetz der Macht, S. 5; ditto, Recht u. Macht, S. 10.

7) Wieser, Gesetz, S. 4-5.

勢力が誰のものであり、たれの爲に利用せらるるかを決定するものは内的勢力そのものである。

例へば征服國家に於ける征服階級の權力について考ふるに、被征服階級を壓迫し得るものは、征服者の民族感情フオルクスゲフユールによつて結合せられたる内的勢力集合である、即ち其團結を作り上げてゐるところの素朴ではあるがやはり、一の内的勢力である。而して彼等の勢力の増加は被征服者の外的勢力集合の中に此内的勢力をしみ通らせ、それを征服者の爲に利用しうるに至らしむることである。

これだけのヴィイザアの見解を手がかりとして、私は次の如くに述べよう。ヴィイザアは外的勢力は人格的のもの、而して内的勢力は無人格的のものであるといふけれども、このことは、對立せしむべからざるものを對立せしめたのではないか。外的勢力とても人格に歸屬せざるものは無人格的のものであるし、内的勢力とても人格的のものを含む。畢竟、ヴィイザアに於ける内的勢力は上に述べたる社會的壓力に外ならず、即ちデュルカイムに於ける社會現象の特徴としての強制そのものをさすのである。従つてこれと對應するやうに、其外部的勢力の内容を社會的壓力として改め解釋すれば、それは社會の加ふる外部的壓力、即ち外部的手段を通しての強制に外ならぬであらう。

これから考察を社會的勢力即ち一定の人格に歸屬せしめられてゐる勢力に限ることにする。これについてもやはり、内的勢力と外的勢力とを區別することが出来る。勢力とは他の主體の意志を決定する可能であるが、此可能即ち相手の側から見る時の服従は、自發的のものであり得る、

即ち勢力が内的に基礎づけられたるものであり得る。道徳や慣習に基き、又は、自らなる尊敬の念慮に出づるところの服従でありうる。それが或はまた、外部的なる強制にもとづくものであり得る、此場合勢力は外的に基礎づけられてゐると云ふべきである。如何なる仕方にて基礎づけられてゐるにせよ、勢力は其作用を営む、即ち相手の意志を決定するといふ作用を営む。此作用を営むに當つて必要があれば、種々なる外的表明の様式をとる。

其一は武力である。これによつて相手を強制する。これは服従を捧げつつあるものの外的手段の力によりて、之を捧げざるものを強制するといふ形に於て行はれる。其二は、精神的なる制裁である。此制裁は勸奨壓迫といふ積極的消極的の二の意味にとらるることを要する。名譽、非難耻辱といふが如き、精神的なる苦痛享樂を與ふることによつて一定の意志方向を相手に強制するのである。其三は物質的なる、即ち經濟的なる制裁である。此場合の制裁もまた、前の場合に於けるが如く、積極的消極的の二の意義に解せらるることを要する。さてかゝる見方からいふと、武力は社會的勢力自體であるところの、服従せらるること、そのものではない。たゞ此勢力の作用する一の様式であり、従つて一の部分的なる勢力、又は勢力の部分的表明形式である。そのことはまた同様に、經濟的なる富の力についてもあてはまる。尤も、これらのものは、こゝに問題としてゐるところの個人的なる勢力、即ち社會的勢力特有の作用様式ではなく、社會的壓力そのものがまたかゝる作用様式をとる、別して、精神的なる制裁の如きは、慣習道徳に於て特に有力

なる作用様式となつてゐる。

此點は如何ともあれ、社會的勢力の此表明様式によつて新に外的に基礎づけられたる勢力が成立する。こゝに詳述することを得ざる過程によつて、外的勢力は沈澱し固定化して内的勢力となる。⁹⁾ 内的勢力は新なる外的勢力を基礎づけ、外的勢力は内的勢力に變形し、かくして勢力は自ら増加する傾向をもつ。私のかつて勢力加速度の法則といへるものはこれをさす。¹⁰⁾

社會的勢力はまた内生的勢力、外生的勢力の二に分たれる。これはある集團即ち部分社會又はその成員に加はるところの勢力が此部分社會内部より成立したるものであるか、即ち其成員の服従の上に基づけられたるものであるか、否かによるところの區別である。例へば、あまたの民族から一の國家が構成せられ、而も現在の國家權力が主として其中の一の民族の團結によりて支持せらるる場合、この國家權力は他の民族にとつては大體に於て外生的勢力であると見なければならぬ。これに反して、一の宗教團體の成員が此教團そのものの勢力、延いては此團體の代表者たる人格の社會的勢力に従屬する場合に於て、彼は内生的勢力によつて統制せられつゝある。内生的勢力と内的勢力とは必ずしも相對の概念ではない。一の部分社會の内生的勢力は必ずしも内的勢力ではない。其成員の武力による相互的強制に基くところの外的勢力として成立し、而も外部の部分社會に向つては統一的なる勢力として壓迫を加ふことがある、此際、此勢力は外部の社會にとつては外生的勢力である。現實に於ける社會的勢力が外生的であるか、内生的であるかは、

9) 社會學原理に於て社會意識の拘束力を論ずる場合に詳述した。
10) 階級及第三史觀と、社會學原理との何れに於ても詳論してゐる。

勢力を及ぼすものと、及ぼさるるものとの間の結合が如何なる程度事情のものであるかによつて定まる。AがBに勢力を及ぼすにしても、A Bが密接なる團結によつて一體をなすものと見らるるときに、其勢力が若しBによつて支へらるるものならば、Bによつて外生的勢力ではない。さうでないときに外生的勢力である。

三

次に、社會的勢力を其分配様式に従つて區分しよう。全體社會の内部にあまたの部分社會があり、その各が社會的勢力の分配にそれぞれ影響をもつことを疑はぬ。けれども、こゝにはその中の最も中心的なるもの、即ち國家による勢力の分配を考察しよう。然る後に、他の部分社會による勢力の分配の影響を併せ考ふることによつて、現實に於ける社會的勢力の分配を説明する手がかかりとしたい。

國家は其機能が社會的防衛にある爲に¹¹⁾、内部のならびに外部の反對者に對して之を防衛するだけの有效なる手段をもたねばならず、其爲に成員に對して極度の服従を要求し且つこれを一定の組織にまとめ上げる。而して此組織せられたる服従は、組織せられたる勢力として國家の權力を構成する。此國家の集中せられたる勢力は、種々なる仕方にて分配せられ、それによつて各主體のもつところの社會的勢力といふ形をとる。分配せらるるといふことは、各主體の意志の遂行を支援し、擁護することである。第一。機能に従つて分配せられる。國家は其機能を營みうる爲

11) 國家と階級、第一編、國家と社會、七頁以下。

に、あまたの機關をもち、此機關に當るもの、即ち組織を形成するところの各成員は、其營むところの機能に應じて、職權を賦與せられる。而して此職權がある程度まで其職務にあたる主體のものと思われる。此程度は勿論、社會の複雑なる事情によつて決定せられる。社會生活が極度に理化せられ、合理的なる分析を加ふる場合に於ては、其主體が社會の一機關たる職務の故に職權としての勢力を分享すること、彼が個人そのものとして之を有せざることを認めて、二者を出來うる限り引離して考ふるであらう。而して、職權が個人のものであるとして考へらるる程度が少いであらう。其職務に在任する期間が限られたるものであり、就任の様式が選舉によるといふやうな場合には、別してさうであらう。職務と其人との離しがたい聯絡にあるほど、職權は其個人の社會的勢力として認められ易い。¹²⁾ 此點を離れて考ふると、職權の勢力としての強さは、その行使の仕方によつて、人々の利害がどれだけ左右せらるるかに依存する。従つて職權には體統としての上下の組織があるに應じて、其各のものが社會的勢力として作用する場合にも、上下、強弱の段階があることは云ふまでもない。

國家はまた、機能外的に勢力を分配する。云はゞ機關に於ける職務を離れて一定の地位を享有せしめる。地位を享有せしむるといふのは、一定の社會的勢力を與ふることである。云はゞ他の人人にまされる國權の保護を與ふる、即ち廣義に於ける特權を與へる。此特權として數ふべきものには種々なるものがあるであらう。或は廣き範圍に互つて作用する所の一定の權力そのものを

12) Simmel, Soziologie の中に此點に關する詳細の論述を求め得る。

人そのものに附與することである。封建諸侯の地位、征服階級の地位の如きはこれに屬する。或は特殊の名譽（これは一般成員の側に於ける服從の標準を示すに役立つ）、特殊の權利を人そのものに與ふることである。今日の權力なき貴族の地位はかくの如くにして存立するものであらう。或は、經濟的なる富を享有せしむることもあるであらう。こゝまで述べて來ると、勢ひ、本原的なる社會的勢力と派生的なる社會的勢力との區別を考へねばならぬ。

社會的勢力は服從せらるること、そのことであるが、それは種々なる姿に於て分享せられる。かくして、云はゞ派生的なる社會的勢力が成立する。或る場合に、それは全部じふぶ的なる權力として分享せられる。封建諸侯の享有したる勢力はそれである。或は生活の方面によつて限局せられたる職權のみが分享せられる。或る場合には、更に限定せられたる程度、範圍の權利のみが分享せられる。此等の場合、勢力は部分的である、相手を特殊なる範圍、事項、程度に於てのみ服從せしめうる可能がまた、一の勢力として派生せられて來る。要するに、派生せられたる勢力としては次の如きものが數へられる。國家權力の分享によつて、一方には全部じふぶ的勢力としての一種の權力が派生せられる。他方には、特殊の機能の方面のみに關する部分的勢力が個人に與へられる。更にまた特殊の地位のみに關して、特殊的、部分的なる勢力が成立する。A、名譽、特殊の權利を與ふるとき、かゝる地位は一の派生的なる部分的勢力たる性質を有する。B、それによつて與へられ保護せらるるところの富（封建諸侯の石高、今日の俸給）がまた、一種の部分的なる勢力で

ある。蓋しこれは國家權力の保障によつて、個人に與へられたるもの、これによつて他の社會成員の何等かの服従が確保せられてゐる。

〔原始的勢力〕

〔派生的勢力〕

〔全部的勢力〕

〔部分的勢力〕

〔機能的勢力〕

〔地位的勢力〕

〔特權（名譽）〕

〔富力（中心權力によつて分配せられたる）〕

上に述べたるものは國家權力によつて派生せられたる社會的勢力である。ところが國家は其權力によつて派生的なる勢力を分配するのみならず、またある種の勢力の分配を間接的にではあるが可能にし又助長してゐる。それは國家によつて私有財産制度が維持せられてゐるから國家は直接に富の分配をしないにしても、此制度に於ける富の集散を可能にし、又必然ならしめてゐる。此場合、富は如何なる意味に於て一種の社會的勢力であるか。その所有が各人の希求する利益内容であるに拘はらず、それが一定の人々にのみ許され、他の成員が此所有を侵犯し得ざる所に一の消極的ではあるが服従があるわけである。加之、各人は其富を求めて、積極的に彼の意志に従ふ。即ち一種の條件附の服従がそこに行はるるわけである。かゝる意味に於て、富の所有は一種の部分的なる社會的勢力であり、而もそれは、國家が認めたる條件の下に於て、云はゞ個人の自由なる交渉の中に授受せられ集散する。かくして成立したる富の勢力は、國家の權力を前提と

するとはいへ、その意志から獨立に行はるるが故に、國家といふ團結の意志によつて成立する勢力を公生的勢力といふべくば、野生的勢力の中に數ふべきである。

全體社會の中には數多の部分社會が含まれてゐる。其中、國家が中心的地位を占むることは云ふまでもない。少くも文明國の現状について云へば、社會的勢力の分配に於て決定的なるものは國家のそれである。けれども、國家以外の他の部分社會による勢力の分配も、看過すべきものではない。中世に於て常に國家と對立し、これと支配的地位を爭ひし教會は今日に於てその勢を減じたとはいへ、勞働組合その他の團結と相まつて、勢力の分配を支配すること決して弱しとは云へない。これらの部分社會による社會的勢力の分配は如何なる仕方に行はるゝか。

部分社會は、教團にせよ、勞働組合にせよ、又産業組合にせよ、その他の結社にせよ、自ら内部に組織をもち、從つて機關¹³⁾を通して機能を營むに至る。而してそれは生活の如何なる方面に於ける結社であるかによつて種々なる程度上の差異はあるけれども、而して此差異は、國家がこれらの結社に對して如何なる態度をとるかによつて左右せらるるものではあるけれども、何等かの強さに於て權力をもつに至る。即ち成員が結社を作り上げ結社そのものに對して、一定の服従の關係に立つ。此服従の程度は結社の共同社會的性質の大なるほど強かるべき性質のものである。而して、一の結社を中心として成立したる權力によつて、國家の場合と略ぼ同様に、勢力の機能的分配ならびに其地位的分配が行はれる。

13) こゝに機關といふのは廣義のものである。Max Weber の Stab といへるものよりも更にひろい。Max Weber, Wirtschaft u. Gesellschaft, S. 29.

一の部分社會の一機能に當るものは此機能のゆゑに云はゞ職分の上の勢力を有する。その強さは此社會そのものが生活の如何なる範圍を支配し従つてどれだけの權力を有するかによつて異なる。例へば昔日の教會にあつては、教權が俗權と對立して、國家を壓迫するが如き地位にありしのみならず、ある程度まで世俗的な權力をすら掌握した。かゝる場合にあつては、教會によつて機能的に分配せられたる勢力は國家によるそれに對抗する地位を占有せしめたであらう。勞働組合の發達によつて其權力が増加するならば、これと相近き趣を呈すること、全く不可能なりとも云ひがたい。けれども近代國家の成立と共に、國家の機能は増加し部分社會の勢力範圍は漸く減衰した。なほ部分社會は勢力の機能的分配を行ふのみならず、一定の地位の分配をも營むことは、前述の如くである。尤もこのことは、其結社の組織が體統的即ち階級的原理をどれ丈けと入れるかによつて、程度を異にする。極度に民主的原理の上に立つところの結社は機能的分配以外の勢力分配即ち地位的分配を認めぬであらう。又國家と近き組織をもつ教會の如きにあつては、内部に種々なる機能外の地位を認め、これに對する服従を強ひるに結社そのものの權力を以てするであらう。何れにせよ、國家以外の結社はそれぞれ、其成員に對して勢力の機能的ならびに地位的分配を行ひ、かくして分配せられたる諸勢力は各主體に歸屬し集中して、各自の全體社會に於ける地位の上に作用する。たゞ、部分社會の勢力の地位的分配について云ふべき事がある。多くの部分社會は地位的なる勢力の分配を行はぬであらう。これは地位を其社會内部に於け

一種の特權と見る限りに於てである。けれども、一の部分社會が其成員のすべてに對して支援と保護とを與ふことはあり得るのみならず、寧ろ一般的事である。其團結が緊密であるほど、別して團結が其成員の階級的地位の向上をめざしてゐるほど、此保護によつて與へらるる成員の勢力、即ちその外部に對する勢力は顯著である。此意味に於て部分社會の地位的勢力といふことを、かゝる範圍にまで擴げて考ふる時には、それは廣く見らるるところの現象である。

けれどもこの外に、云はゞ定形なく、流動的な社會的勢力があることを忘れてはならぬ。これは、一定の結社とは交渉なく、從つて組織に支持せられざるころの勢力である。それは、或は慣習風俗道德などの中に基礎を有し、或は新しき思潮運動等の流の中から成立する。例へば、一定の血統や傳統のものに對する一定の態度は屢々慣習の中に、風習の中に規範化せられて居る。而してこれが成員のある程度の服從を保障してゐる。封建時代に於ける諸侯の地位、今日の資本家の地位は、かゝる傾向の上に築かるところなしとしないであらう。更に、新しき思潮や運動などの社會意識の動きが生ずると、一方に於て此動きに於て指導者地位を占むるものに對する服從が生ずるのみならず、他方に於て、所謂價値の顛覆が行はれ、もはや尊重せられざるもの、新しく尊重せらるるものが社會意識の内容如何によつて生ずる。かゝる事實を過去二十年間、例へば民衆の地主資本家に對する態度の中に、軍人に對する態度の中につぎつぎに經驗して來た。

富の勢力について若干の附記を加へよう。國家が直接に分配するところの富については前に述

べた。國家は意識的に自ら富の分配を行ふのみならず、各に對して所有權を保護することにより云はゞ間接の分配を行ふ。即ち個人の自由なる交渉の間に富が集散する。國家は其權力を以て、ある主體に歸屬したる富の所有を保護する。かくして富の所有は之を侵害するものに對して國家權力による壓迫を加へうるといふ、一の消極的な勢力を意味してゐる。けれどもそれ許りではない。此富が個人間の交渉に於ては一の云はゞ間接的な勢力を意味する。即ち、其富の給付によつてある範圍程度まで人人の服従を求むることが出来る。此意味に於て、富はもとより外的勢力ひいては内的勢力を得る一手段である。尤もどこまで、富が服従を得る手段として役立ち得るかは、一方に於ては社會の團結の事情により、他方に於ては、權力支配の事情による。即ち、今日の如き利益社會的事情の下に於ては、富に對して單に勤勞を提供するに止まるところの勞銀關係が成立する。勿論、このことは企業内部に於て内的勢力乃至共同社會的關係が全く排除せられ經營が純然たる契約的對等的のものとなることを意味するのではない。共同社會的な團結の事情の下に於てはこれと趣が異なつて来る。富の授與に對して、勞役を提供すると云ふ關係、又は何等かの經濟的給付を受け、それに對して若干の人的報償をするといふ關係は、容易に、緊密なる共同社會的結合を生み易く、ひいては、主従の關係を生じ易い。このことは、中央に於ける國家權力の支配が衰へ、從つて何等かの強力なる統制關係を生ずる場合に於て然り。かくして、富は、それ自體、一の間接的な而して條件附の勢力であるけれども社會の事情如何によつては、容

易に直接的なる勢力關係、即ち服從の關係を伴ひ得る。負債を償還し得ざるものが奴隸となり、又は若干の土地を所有しそこに土地と離しがたく結びつける農民をもてるものが領主と化するが如きは、富が服從又は地位を生む例である。而も巨萬の富を擁するものも、單に劣紳として乃至素町人として遇せらるるといふ（中華民國の一部分の現状、日本の徳川時代的一面）が如きは、さうでない場合を示す一例である。

四

こゝに一の餘論を試みよう。それはこゝに云ふところの權力と、暴力即ち武力（或は物理的強制）との關係が如何なるものであるかといふことである。

今まで國家又はその他の社會の權力は、極めて屢くと云ふよりも寧ろ、殆ど常に、武力と同一視せられて來た。この點をどう考ふべきであらうか。私はこれを論するにつけて、かつて述べたる私見を吟味することの必要を感じる。私が今までに試み來つたところの社會的勢力の分析に於ては、私は、これを三に小分した。まづ勢力とは服從せらるるといふことであるが、主體が服從せらるるのに二の仕方がある。一は主體が服從を捕ふるといふことであり、二は主體がそれを見出すといふことである。後者にあつては必ずしも服從を求むるのではないけれど服從者から自發的に服從せられる。前者にあつては主體が服從を何等かの仕方によつて強制しうる地位にある。若し、他の表現をかるならば一方は外的勢力であり、他方は内的勢力である¹⁴⁾。武力富力は前者に

14) 「階級考」初版、一八四頁以下、參照。「階級及び第三史觀」に於ては、權力と武力とを同視するには至つてゐない。たゞ二者の聯絡の説き方が不十分である。例へば一七頁。

屬し、威力（個人が自己の卓越せる力の故に自ら相手によつて服従せらるる姿たとへば權威、威光、又はマクス、ウェバアの意味に於けるカリスマ）は後者に屬する。勢力を此の如くに分類する限り、權力を武力と同視するのでなくては、此分類の中に其所屬を見出すことは出來ぬ。

けれども、たとへば國家の權力を武力と同視し得るか。勿論權力は強制的の爲に必要さへあるならば、武力を行使し得る。けれども、一方に於ては逆に武力即ち權力といひ得らるるか。征服者の武力は被征服者に對して直ちに權力といはれ得るか、革命階級の暴力はそのまゝにして權力といはれ得るか。他方に於て、堯舜の政治に於て何等の武力も必要とせられぬ、そこには自らにして治まるだけの力が作用してゐる。而も此力が權力であることにも問題はない。必要があれば武力を作用せしめ得る力ではあるけれども、それ自體は武力ではないものが權力であると思はれる。即ち一方に於て、武力はそのまゝ權力ではなく、又權力はそのまゝ武力ではない。權力は屢々武力として表現せられてすらもゐる（たとへば權力の分立を *Gewaltenteilung* として表現するが如き）。けれどもこれは誤りである。然らば、此二者の關係をどう見るべきであらうか。

權力とは組織せられたる服従であるといひ得る。社會が組織をもつに及べば、社會そのものに對する又は其團結の中心に對する服従が組織せられる。此服従が如何なる生活方面に及ぶものであるか、又如何なる強さのものであるか、といふことは、前に述べたるが如く、種々なる事情によつて定められる。此權力は、服従の義務を負ふもの、又は其社會によつて服従を要求せらるるものに對して、服従を強制することが出来る。此強制的様式に三あることは、前に述べたところ

るである。一は即ち武力である。服従するものの物理力を利用することである。これは直接なる強制である。二と三とは共に間接的なる強制である。此際服従すべき個人にとつて價值あるところのものを與奪することによつて、服従を強制する。價值あるものが特權名譽といふが如く精神的のものであるか、又は然らずして物質的なるものであるかによつて、間接なる強制が二分せられる。而して強制がつねに一種の外的勢力を意味することから、勢力の作用様式の此三は共に、一の部分的勢力として數ふことが出来る。比喻を以て表現すると、一のエネルギーといふ原力が其部分的作用として熱をもち光をもつと、熱も光も部分的なる力と見られうるに近い。

此の如くに見て來れば、武力即ち權力といふべきではない。武力は權力の作用する場合に於けるたゞ一の表現形式又は作用の様式である（而して、それは前に述べたる社會的壓力の作用様式でもある）。それは權力の中に、つねに潜在又は可能の状態に於て含まれてゐる。けれども、多くの場合權力はかゝる表現によつて作用することなくして、むしろ內的勢力として作用しつゞけながら、社會統制の機能を營む。なほ權力の他の作用様式として、富力をあげたが、これは富力の全部ではない。權力に基いて所有權が認めらるると、各個人は任意に其富を處分し得るし、それによつて相手から何等かの服従を要求し得ることは別に述ぶるが如くである。かくて權力によつて直接に分配せらるる富のみが、今の場合に於ける權力の作用様式としてあらはれる。

社會的勢力の考察は此一篇だけで盡きるわけではない。私は進みて社會的勢力の分配の様式を考へたいと思ふ。けれどもそれは次號に於て題目を改めて之を論じよう。その論をもちて、私が數年來、腹案にのみもつて筆をとることのなかつた勢力の理論が、粗雑ながらまとまるわけである（一九三四、一一、五朝記）。